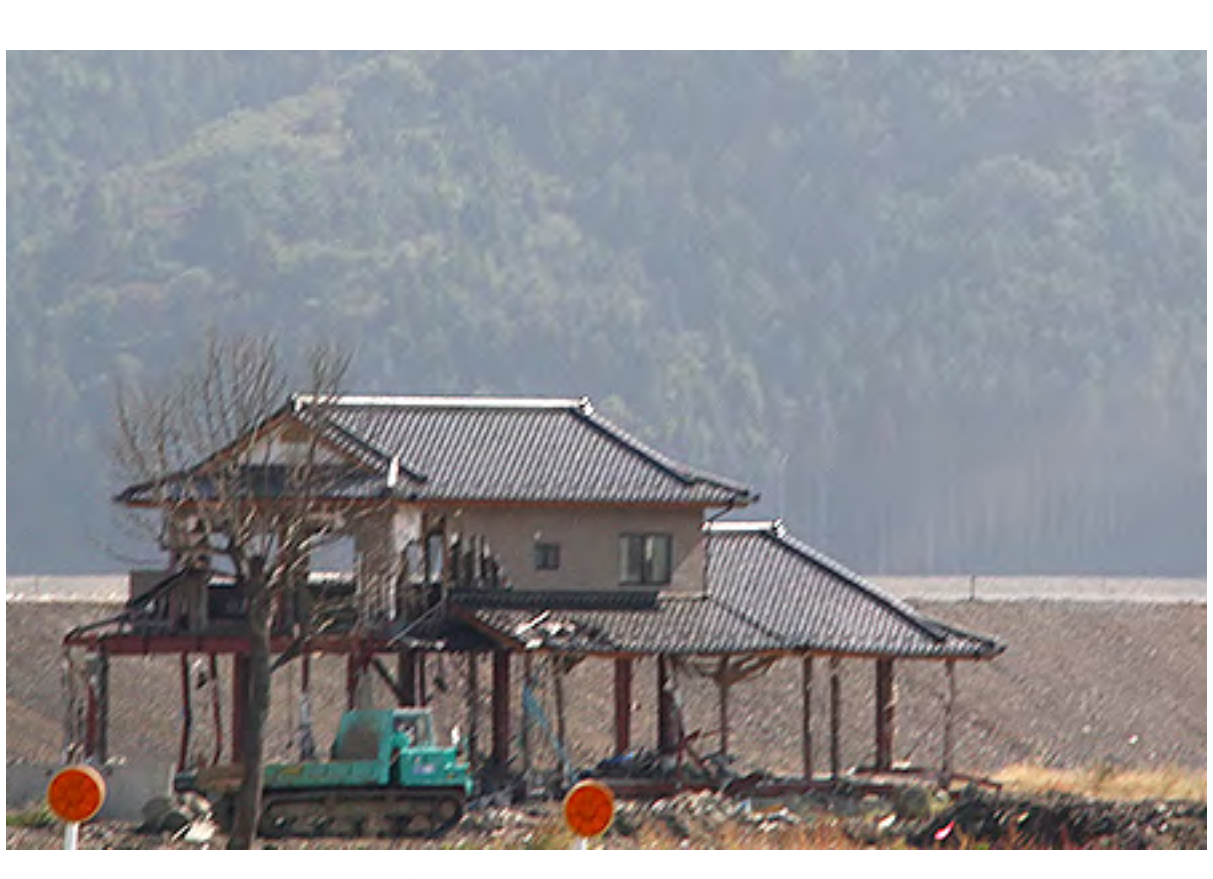
3.11後を生き抜くコミュニティーの力

牡鹿半島 福貴浦より

1 2 3

Like 0　ポスト

東日本大震災の年の11月、木の家ネットでは職人がつくる木の家ネット第11期総会を宮城県登米・石巻エリアで行い、津波被災から半年経った北上川河口・十三浜地域を訪れました。



2011年10月、大震災から半年後に宮城県で行った木の家ネット第11期総会より。石巻の浜エリアは、道がまだ寸断されており、地元のバスでまわった。

あれから３年経った今、石巻では木の家ネットの二人のメンバーが復興に携わっています。一人は石巻市北上町十三浜の建築士で、石巻での総会を敢行してくださった佐々木文彦さん。佐々木さんは「つぐっぺ おらほの復興家づくりの会」を立ち上げ、地域材での家づくりを提案しています。もう一人は、総会以降に生まれた縁で石巻での佐々木のさん設計による「We are One マーケット」建設に携わるために埼玉県からやって来て「復興応援大工」として石巻で活動している杉原敬さん、ことマイケルです。

佐々木さんは「地元住民」、マイケルは「よそ者」として、それぞれ、浜の暮らしやコミュニティーの再建を目指して、建築を通してできることを、力の限りしています。しかし、海岸近くまで山がせまる浜では、集落を再建するのに高台の造成から手がけなければならないこともあり、仮設住宅を出た後に新しい生活を始める場となる住宅の建設まで進んでいないのが現状です。

昨年11月、奈良で行われた木の家ネット第13期総会の会場と石巻とをiPhoneでつないで、ぎっくり腰で急遽総会に来られなくなったマイケルが語る石巻の現状をみんなで聞く時間をもちました。「ガレキは片付いてるし、インフラも整いつつある。けど、浜の人たちの多くはまだ仮設住宅や借り上げ住宅に住んでいる」「津波でなくなった学校が統合になり、子持ち家族は学校の近くに引っ越していく。年寄りばかり残る浜は限界集落化している」「集団移転先の高台造成が始まっていない集落も多い。しびれを切らして浜から内陸に移った家族もある」「造成が始まった地域には住宅メーカーが営業攻勢をかけていて、一戸一戸バラバラな家づくりが始まろうとしている。地域らしい家や暮らしがなくなってしまいかねない」生の声で聴く現実に、復興の道のりの長さや地域のありかたが変わりつつあることの深刻さを、あらためて感じさせられました。

一方でマイケルは、彼が関わり始めた、ゆっくりとではあるけれどもようやく動き始めた、ある集団移転計画についても話してくれました。「牡鹿半島に福貴浦（ふっきうら）という35世帯の集落がある。そこで集団移転をする高台での復興住宅建設に関わる流れになってきている。大工として復興に直接携われるチャンスなので、集落をまるごと地元の木の家で再生したい。人手も足らない。調整も大変。けれど、やりがいのある仕事になる。みんなにも応援してほしい！」と。翌朝の総会でも木の家ネットとして何ができるかみんなで話し合い、まずは現状を取材したり、マイケルに現地での聞き書きをしてもらったりしたことを、木の家ネットから発信することを決めました。

以上のような経緯で、今回の特集「3.11後を生き抜くコミュニティーの力」では、「よそ者大工」マイケルの案内で取材をして来た石巻市牡鹿町福貴浦からの、津波被害地の「これまでとこれから」をレポートします。

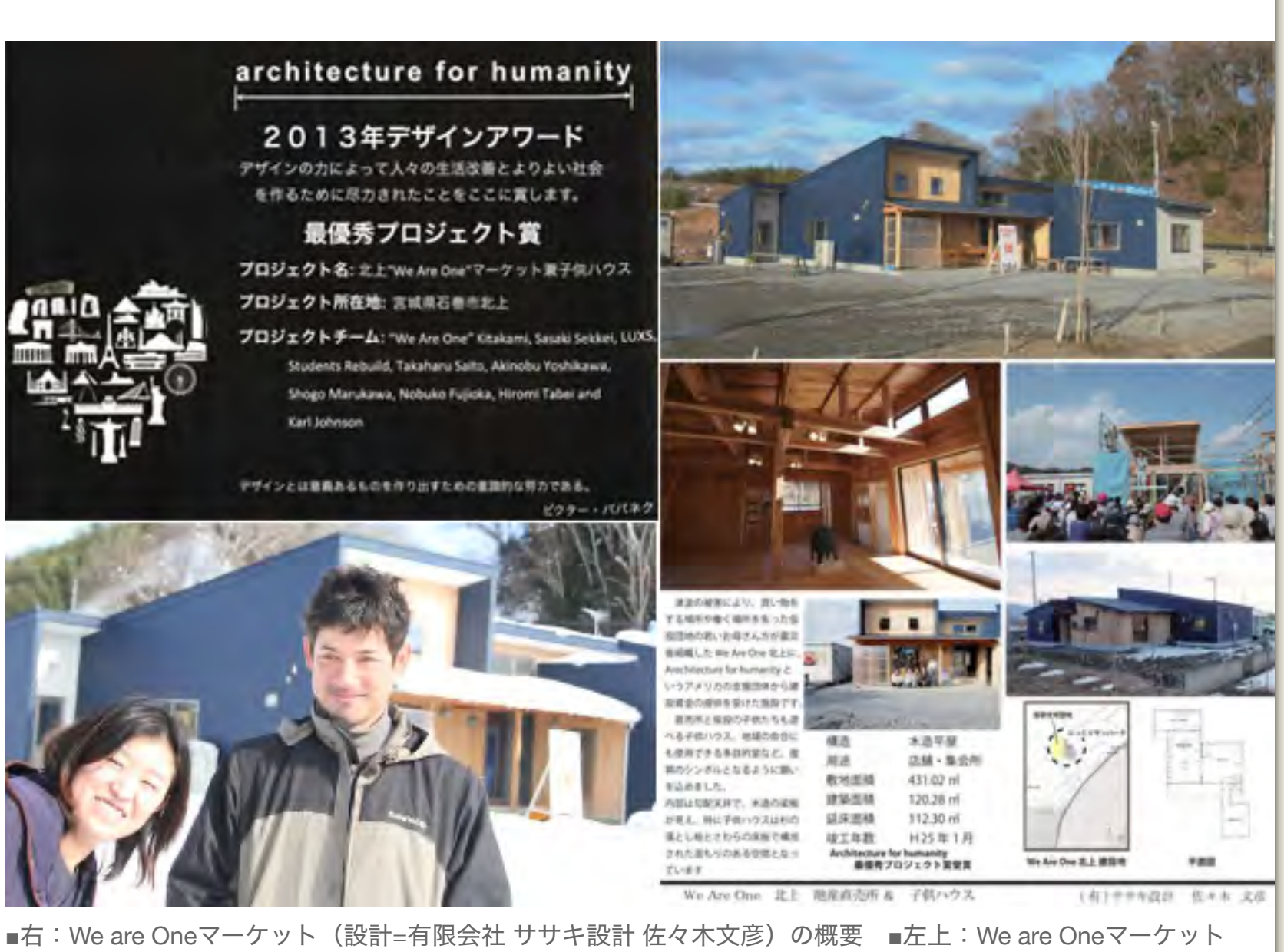
大雪で遅れ遅れの到着！

2月9日。東北取材の前日、木の家ネット事務局のある山梨県の山間部には50センチの積雪があり、行けるかどうか自体、危ぶまれたのですが「中央本線の各駅停車は遅れをもって運行」との情報に望みをかけて出発。

14時には宮城入りする予定が、新幹線で古川駅に辿り着いたのが20時半。レンタカーの手続きを済ませ、大雪の中のそろりそろり運転と、途中思わぬ通行止めによる迂回もあったりで、総会の時にもお世話になった追分温泉に着いた時には、日付が変わる頃になっていました。

営業開始から一年。地域に根付いた We are One マーケット

朝、追分温泉から北上川流域に下り、今も仮設住宅に多くの世帯が暮らすにっこりサンパークの下に完成し、営業をはじめて一年経った「We are One マーケット」に立ち寄りました。２年前に「避難所近くに、お母さんたちが買い物できる店と、子ども達が遊べる場所を併設したマーケットを作りたい！」という強い想いをもった地元の佐藤尚美さんと「被災地の復興に大工として関わりたい」と意気込んでいたマイケルとが、佐々木文彦さんの仲立ちで出会ったことに始まり、多方面からの協力を得ながら形となったお店です。



architecture for humanity
2013年デザインアワード
デザインの力によって人々の生活改善とよりよい社会を作るために尽力されたことをここに賞します。
最優秀プロジェクト賞
プロジェクト名：北上"We Are One"マーケット兼子供ハウス
プロジェクト所在地：宮城県石巻市北上
プロジェクトチーム："We Are One" Kitakami, Sasaki Sekkei, LUXS, Students Rebuild, Takaharu Saito, Akinobu Yoshikawa, Shogo Marukawa, Nobuko Fujioka, Hiromi Tabei and Karl Johnson
デザインとは意義あるものを作り出すための意識的な努力である。
ビクター・パパネク

■右：We are Oneマーケット（設計=有限会社 ササキ設計 佐々木文彦）の概要　■左上：We are Oneマーケットは、Architecture for Humanity の2013年デザインアワードで最優秀プロジェクト賞を受賞　■左下：オーナーの佐藤尚美さんと大工のマイケル　北上ふるさと再生プロジェクトなどを通じて支援くださった皆様、ありがとうございました。

3.11のずっと以前から、北上川河口を見守って来たお地蔵さんが座るマーケット前で、佐藤さんは「こんな雪、今までにながったさー」と言いながら、雪かきをしていました。

マーケットには、おかず、駄菓子、日用品にまじって、収穫できるようになったわかめや昆布など、地元の海産物が並んでいました。子ども達が遊べる無垢の木の床が張られたスペースには、絵本が並び、楽しく飾り付けがされています。「いったん仮設にランドセル置いて来て、お母さんたちが夕方の買い物に来るまで遊んでく子が多いですよ」とのこと、しっかり活用されていて、嬉しい限り！です。

1年目
2年目
3年目
その後～
北上地域の生活再生に向けた活動

■左：木の香りでいっぱいの子どもハウス　■右：北上の地域づくり運動の拠点ともなっている　■下：これまでの活動の様子の写真がボードにたくさん貼られていた

リアス海岸を南下 見えない集落

「牡鹿半島まで行ぐのー？えーーっ 通れっかなー」と佐藤さんに見送られて、出発。北上川にかかる新北上大橋をわたり、北上から雄勝、そして牡鹿半島へと広域道路を走ります。

三陸のリアス海岸地方は、急峻な山が水没してできた、険しい山襞がそのまま海岸線となった地形です。山の中腹よりも上を走る道路は、トンネルを越え、次の山襞へと突っ切っていきます。道沿いに集落はないどころか、見えもしません。ところどころに広域道路から浜にある集落へとおりる枝道が分かれています。その道をくねくねと下りきった終点、つまり山襞に深く切り込んだ入江の最奥に、港と集落があるというのが、浜の暮らしの場の姿です。

石巻市雄勝から女川に抜けるあたりの風景。深く切り込む入り江と海面から屹立する山

このような広域道路がなかった昔、浜と浜とは急峻な山で隔てられ、隣浜といえど、山伝いに越えていくか、船でまわるかしかありませんでした。急な山がつくる入り江に囲まれた海は、外海と違って静かで、波も穏やか。いい漁港となるだけでなく、養殖に向いているため、ワカメやカキ、昆布など、それぞれの浜で特徴ある生業が営まれてきました。

しかし、いったん地震となると、この静かな入り江に外海から入り込んだ津波は高波となり、猛威をふるうのです。東日本大震災の時もそれが顕著な形で起きてしまいました。

牡蠣の養殖を生業とする浜 牡鹿半島 福貴浦に到着

牡蠣の養殖で成り立つ福貴浦

広域道路から浜にジグザグとおりていくと、左手が海で右手が山。海には小さな港があり、小型船が何艘か。車を降りると、海の幸のにおいがします。山と海の間には「福貴浦カキ加工所」があり、山との間に、牡蠣の殻が山となっていました。加工所の前で、阿部信彦さんが待ってくれていました。

阿部信彦さんです。ぼくら仲間内では「バビちゃん」って呼んでるんだけどね。

阿部です。昨日は追分温泉でゆっくり話せるのを楽しみにしてたんだけれど、大雪で会えなくて残念でした！

牡蠣を養殖する漁師の阿部信彦さんことバビちゃん

津波でほとんどをさらわれるというマイナスからのスタートでありながら「地元の生業で、コミュニティーで生きていく」ということに希望をもって前に進もうとしている阿部さんの気負わない語りと気さくな笑顔に、取材しているこちらがいつしか引き込まれていきます。マイケルが「当面はここでシゴトするのが俺の大工としての本望」と決意してしまったのもも、分かるような気がしました。

次ページ以降では、加工所の会議室兼休憩室でお伺いした、震災後のこれまでのお話、これからに向けての展望などをご紹介します。

Like 0　ポスト

1 2 3

福貴浦の船着場。右側のフォークリフトからぶら下がっている縄の先に、養殖した牡蠣が結びつけられている。

木の家イベントカレンダー

最近の特集記事

2019年6月15日
やさしくて強い、理想の家を求めて: アイ設計研究室 大前泰秀さん

2019年5月15日
磨き上げた職人技で、木を生かす：西岡建築一級建築士事務所　西岡健一さん

2019年4月20日
大工と左官の職人プロジェクトチーム 総合建築植田 植田俊彦さん 俊司さん

2019年4月10日
本物の家づくりを、自由に、楽しんで：株式会社木神楽　高橋一浩さん

2019年1月5日
新春特集 2018年のベストショット集

2018年12月29日
板倉仮設住宅 移設ものがたり part3 大工の声＆今後の課題編

2018年12月17日
板倉仮設住宅 移設ものがたり part2 実録編

2018年12月14日
板倉仮設住宅 移設ものがたり part1 概要編

2018年9月4日
番匠 剱持工務店 副棟梁・剱持大輔さん

2018年8月15日
鶴岡総会予告 その１　散るより、生き延びよ！

人気のある記事

伊勢神宮遷宮・御杣始祭り：300年の大木を伐る！
18件のビュー

家のお風呂　こうやって作る、こうやって保つ
17件のビュー

冬の温熱調査合宿報告
15件のビュー

込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記
14件のビュー

古川 保の熊本市川尻町 震災日誌
11件のビュー

設計士・丹羽明人さん(丹羽明人アトリエ)：納得できる答を探して
11件のビュー

大工たちによる「家戻し」の記録
11件のビュー

工務店・西條正幸さん(ビオプラス西條デザイン)：北海道で無垢の木の家づくり
10件のビュー

設計士・川端眞さん（川端建築計画）：小さな石場建ての家
10件のビュー

設計士・古川保さん(古川設計室)：木の家づくりは仕組みづくり
9件のビュー

この記事のタグ

災害と木の家
現場レポート
環境と共生する家づくり
顔の見える関係

同じタグがついた別の記事

2015年9月15日
里山循環大工：池山琢馬（一峯建築設計）

2016年6月21日
熊本震災レポート２

2015年7月27日
独立電源＝オフグリッドの家

2014年6月5日
大場江美さん(サスティナライフ森の家)、日影良孝さん(日影良孝建築アトリエ)：手のひらに太陽の家

2012年6月15日
原発に頼らない家づくり＆暮らし方

関連する記事はこちら

里山循環大工：池山琢馬（一峯建築設計）

工務店・宮本繁雄さん(建築工房 悠山想)：古びない家

大工たちによる「家戻し」の記録

工務店・小田貴之さん（オダエ務店）：木の家づくりのプロデューサー

大場江美さん(サスティナライフ森の家)、日影良孝さん(日影良孝建築アトリエ)：手のひらに太陽の家

事務局
〒711-0906
岡山県倉敷市児島下の町5丁目7-3
児島舎内
mail： jimukyoku@kino-ie.net
tel： 086-486-5464

3.11後を生き抜く コミュニティーの力

牡鹿半島 福貴浦より

1 2 3

Like 0 ポスト

牡蠣の養殖業 阿部信彦さんのお話

震災を通して、牡蠣を生業とする コミュニティーの結びつきは強まりましたね

牡鹿半島東浜地区には鹿立浜、福貴浦、狐崎浜、竹浜、牧浜という５つの浜があり、どの浜でも牡蠣（かき）の養殖をしています。ホタテの貝ガラに海水中の種カキがつき、稚貝から成長していって、二年かけて立派な牡蠣に育っていきます。牡蠣が育つお世話をし、収穫するのが、ぼくらの生業です。

福貴浦って、どんなところですか？

三世代同居も多く、10人家族なんていう大家族も何世帯があります。子ども達は、山道を20分歩いて、東浜小学校まで通ってます。牡蠣でやっていける集落だから、牡蠣の生業を継ごうという若者も結構いますよ。お隣の鹿立浜と合わせると、三十代の若い跡継ぎ世代が三十人ぐらい居ます。浜にはいつも人が出ていて、牡蠣を洗ったり、剥いたり、船を出していたり・・と、活気があります。ぴーすぼーと石巻の一週間滞在型プログラム「イマ、ココ プロジェクト。」からのボランティアさんが来るようになって、震災前よりにぎわっているかもしれないですね。

仮設住宅ができるまで待ちきれなくて町場に出た家族もいるけれど、クルマで40〜50分かけてでも、通って来て牡蠣を続けてる人も多いですよ。牡蠣をやっていた24戸中、18戸は元気に続けています。まだ処理場ができていないほかの４つの浜の人たちにも、交代で使ってもらっています。住むところは今のところはまだバラバラですが、コミュニティーの結びつきは、前より一段と強くなっています。

いつも誰かしら牡蠣のシゴトをする人が浜に出ている福貴浦。ボランティアさんと地元の人がいっしょになって。

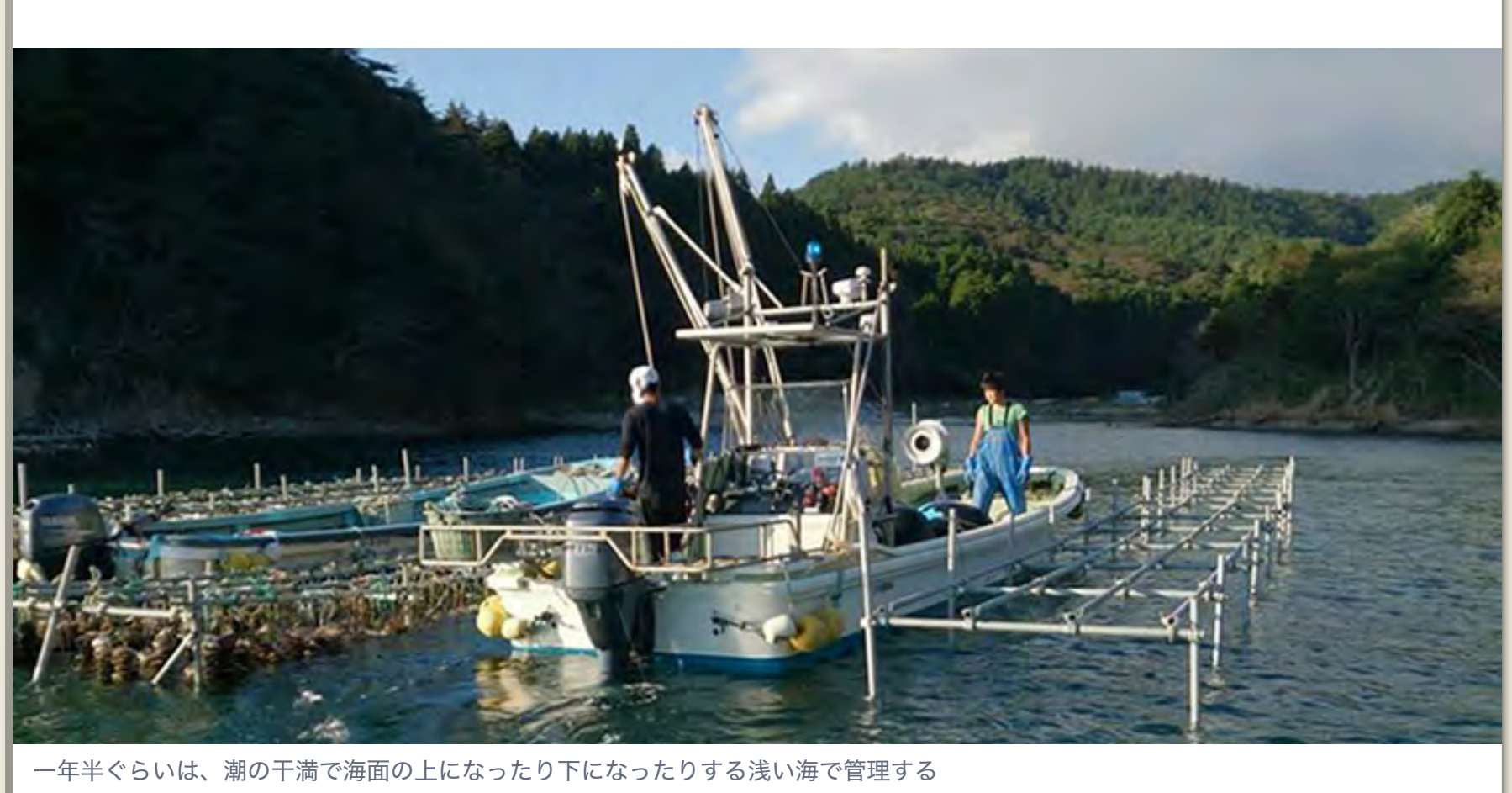
稚貝は抑制気味で育て、沖出し後に 一気に大きくするのがコツ

牡蠣の養殖はおよそどのようにするのですか？

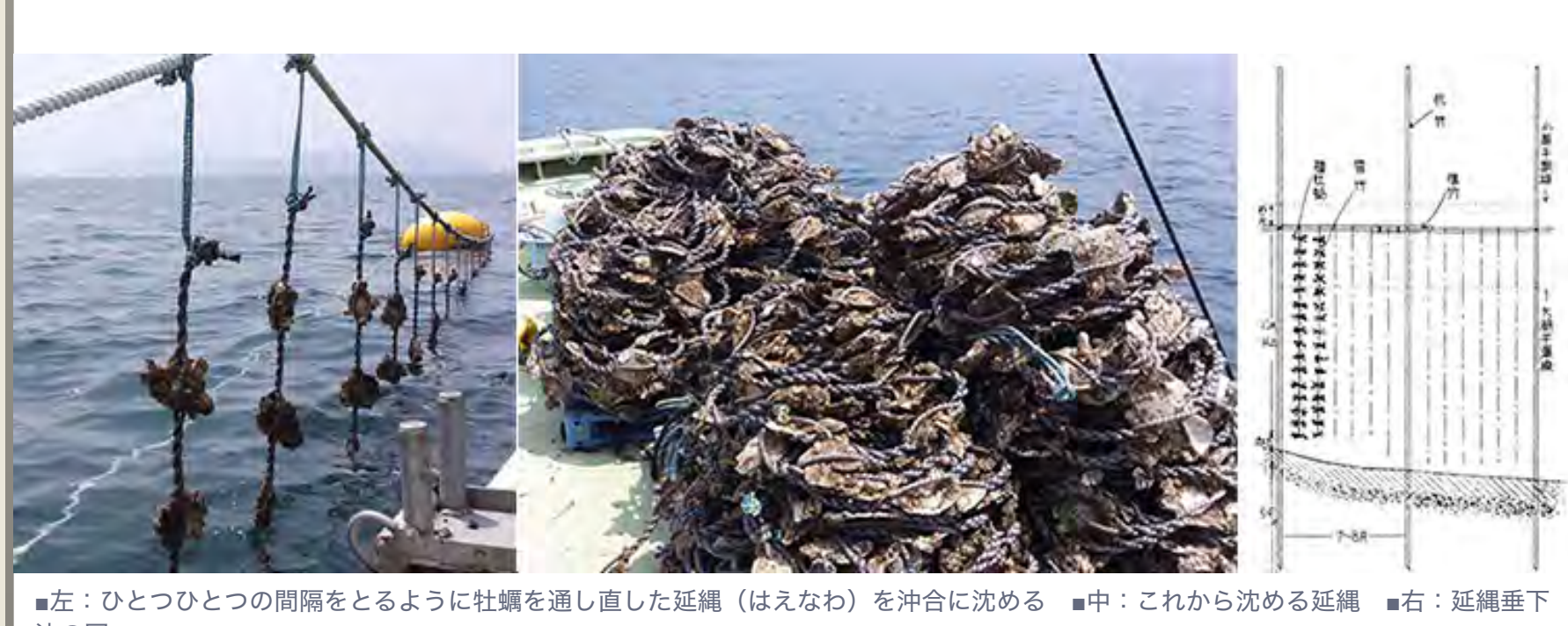
まず、4月から８月が、種付けの時期。牡蠣の原盤となるホタテの貝殻をロープに結びつけ、潮の干満で海水に浸かったり浸からなかったりする、浅い海に置いてやります。過酷な条件で、成長を抑制しながら育てます。

二年目の７月頃から牡蠣を「沖出し」用のローブに、個体間の間隔を十分にとった状態で通し替えて、外海と内海の境あたりのいい潮の流れのところに移します。それまで抑制気味に育てられて来た牡蠣が、プランクトンなどの栄養が豊富な環境に移るこどで貪欲に餌を食べ、ぐっと大きくなります。このように海に垂らしたロープで養殖する方法を「延縄垂下法（はえなわすいかほう）」と言います。

■左：組み上げたパイプ筏に「「イマ、ココ プロジェクト。」で参加したボランティアさんのサインが！　■右：かごに入れた原盤ホタテを、これから単管パイプに取り付けるところ



一年半ぐらいは、潮の干満で海面の上になったり下になったりする浅い海で管理する



■左：ひとつひとつの間隔をとるように牡蠣を通し直した延縄（はえなわ）を沖合に沈める　■中：これから沈める延縄　■右：延縄垂下法の図

毎日小型の船で、牡蠣の様子を見に行って、成長具合や、天敵がついていないかを確かめます。天敵やヒトデとムール貝。牡蠣を食べてしまうので、見つけ次第、やっつけます！ 育ち具合を見て、ロープの位置を移動してやったりすることもあります。

二年目の９月から３月でようやく収穫期を迎えます。牡蠣が重くなってきて、垂らしたロープのいちばん上につけてある浮き樽が沈んでくるので、毎日、ロープの沈み具合を見て、収穫できるようになっていそうなロープを巻き取り機で引き揚げ、浜に戻ります。

■左：大きく育っているのが、水面からでも分かる　■中：いよいよウィンチで引き揚げる　■右：牡蠣のまわりに、海藻やほかの生きものもたくさんくっついてくる

浜に持ち帰った牡蠣は、腸の中のものを出させるために、殻つきのまま一晩、水タンクに漬けます。翌朝、タンクから出して、加工所の高圧洗浄機で洗い、殻を剥きます。女達は一日中、殻を剥き、男達は午後から船で出て、翌日剥く牡蠣を引き揚げてくる。だいたいそんな流れです。

養殖は共同作業なのですか？

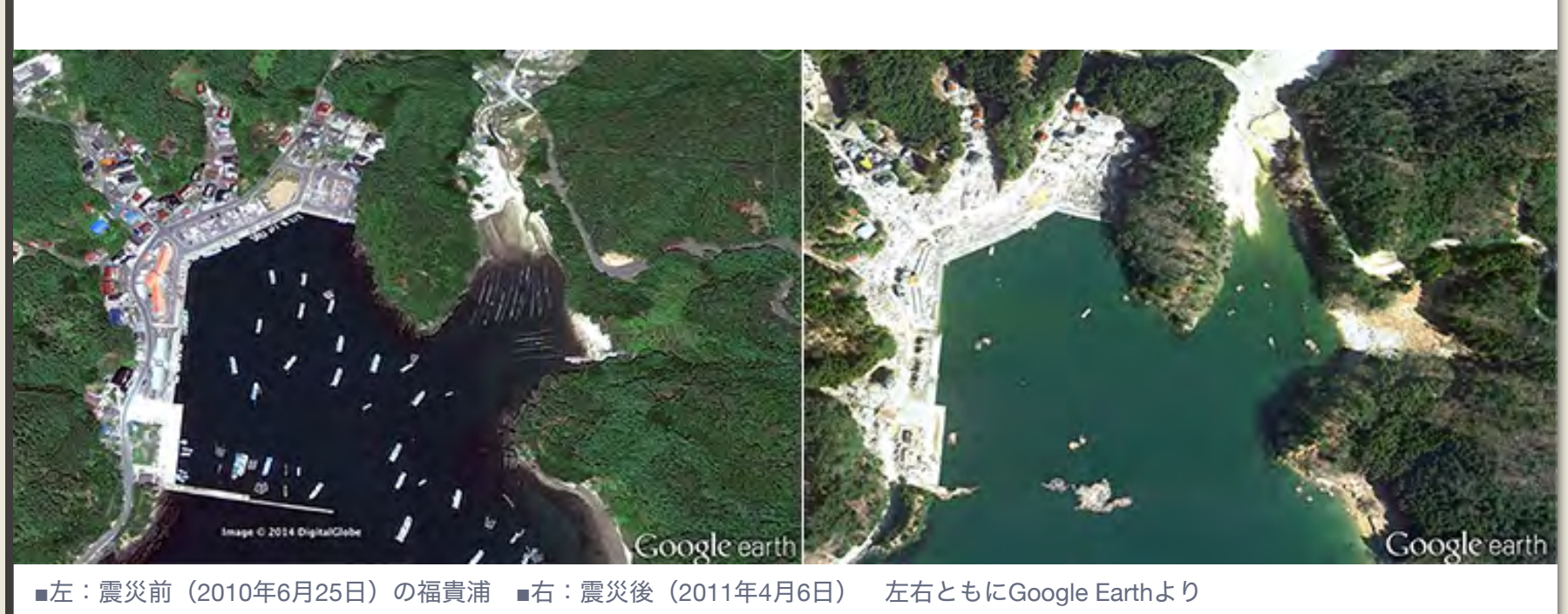
一軒一軒が個人事業主として牡蠣の種付けから収穫、加工、出荷までをこなしています。はえ縄を所有して牡蠣を養殖するのは個人単位でしていますが、収穫した牡蠣を殻から出してむき身にする加工は、宮城県漁協石巻市東部支所で共同所有する「カキ共同処理場」でしてます。

個々人が自営で、実入りの具合や量で日々売上が変動するので、張り合いもあります。雪の多い年は、山の滋養がゆっくりと海に浸透してくれ、牡蠣が美味しくなるので、楽しみですねー。

普段はそんな感じで、家族経営でやっているのですが、震災の後は、みんなが協力し合わなければやっていけないことがたくさんありました。浜にたまったガレキの処理、漁具の引き揚げ、なくなった資材の調達など、あらゆる面で、助け合いの関係でものごとが進んでいきました。本来のコミュニティーの力が、あらためて発揮されたのだと思います。

大震災の地殻変動で、岸壁は1メートルほど沈下。片側の防波堤は50メートルほどが10mほどの高さの津波に流されました。福貴浦32軒のうち、津波に流されず残ったのはたった７軒だったそうです。

なんもかんもが流された



■左：震災前（2010年6月25日）の福貴浦　■右：震災後（2011年4月6日）　左右ともにGoogle Earthより

震災の津波で、福貴浦はどのような影響を受けましたか？

うちはクルマと軽トラが流されただけ、ギリギリのラインで残りましたが、家をなくした人は、もともと山の高台を通る道もあって関係の深い隣の鹿立浜（すたちはま）で家を流された人もいっしょに、福貴浦集会所に避難し、寝泊まりしていました。

食事は、残った７軒で全員の炊き出しをしてしのぎました。どこの家でも、秋に一年分の米を買っていたから、残った家の米でみんな食べられたんです。寝泊まりは公民館だけれど「同じ釜のメシ」食って、前から強かった結束が、ますますかたくなった感じです。

生業の牡蠣についていえば、すべてが海にあったわけだから「なんもかんもなくなった」ですね。養殖資材のロープも、種カキも、みんな流された。震災前には、石巻漁協東部支部に属している東浜５つの浜それぞれにカキ共同処理場があったのですが、それもひとつ残らず流されました。処理場以外にも、収穫した牡蠣を水に漬けて体内に残存するものを排出させるための浄化施設、給油施設、倉庫もありましたが、全てが壊滅状態。途方にくれましたね。漁船は地震直後に田代島沖まで沖出ししたためほとんどの船が整備をすれば使える程度の被害で済みました。ただ、海底が持ち上がって港の水位がもとより下がってしまったので、船は港外に錨泊させてあり、小型ボートで寄り付いて乗り換えているような状況です。

隣浜やボランティアさんと協力して マイナスからのスタート

復興は何から手をつけたのですか？

最初はまず、使えるものをガレキの中から拾っていましたね。国から給料をもらって、瓦礫を撤去して、分類整理して、掃除して・・一年ぐらいはそんな風だったかな。 海の底に沈んだ種カキや流されたロープといった資材も、鹿立浜の人たちと協力して、使えるものは引き揚げました。津波があったのが牡蠣の収穫期が終わり近い頃だったので、ある程度現金化できていたのはまだ不幸中の幸いだったけれど、これから収穫期に入ろうというわかめの人たちはもっと大変だったと思います。

なくなった資材も買わなくちゃならなかったのですが、物資が不足していて、調達には苦労しました。作業も資材購入も、ひとりひとりでやっていてもおぼつかないということで、労力もお金も出し合って、みんなで協力してやりましたよ。

集会所に寝泊まりしながらいっしょに働いてくれるボランティアさんたちのはたらきは大きかった！地元は途方に暮れてるような時期からどんどん動いてくれていて、それを見て自分たちも元気づけられて、ともかくできることをしていこうと、いい方向に向かっていきました。

ボランティアさんはどんなようなことを手伝ってくれるのですか？

最初のうちは海をさらってガレキを撤去して、資材を引き揚げて。それが一段落ついてからは、今でもですが、牡蠣の種付けや収穫の作業そのものも手伝ってくれています。およそこんな日課で動いてます。

ボランティアさんの中には、ネット使って情報を検索するのが上手な人も居てね、牡蠣の仕事に必要な機材類を探してきてくれたり、助かりました。若くて元気のいい、女の子のボランティアさんも来てくれるので、浜により活気が出ましたよ。うちのおばあは、うちでご飯食べてたボランティアさんの写真をいつもそばに置いてね。そんな地元以外の人との深いつながりができたのは、震災以降だものね。

ボランティアさんの受け入れをコンスタントにできているのは、福貴浦に公民館が残ったから。寝泊まりしてもらえる、受け入れ施設があるかどうかは大きいですよ。仮設や個人宅では、無理だしね。

失ったものももちろんあるけれど、その分、いいこともいっぱいありましたよ。後ろ向いててもしかたない、あるものでやってくしかないし、そのためには元気で、笑顔でいないとね！

お金を出し合って共同処理施設を再建し 一年八ヶ月ぶりで生業を取り戻す

■左２つ：カキの殻と身を分ける作業をする台がいくつも並ぶ作業場。カラは下のカラ受けに落ちる　■中：滅菌洗浄機　■右：トレーサビリティーを保証する箱。いったん入れると開けられないようになっている

出荷できるようになったのはいつ頃から？

加工施設の再建については早くから動いて、東浜の中で一番早く、2012年の11月2日から使える状況になりました。建設費は２億７千万。国や県の災害復旧事業費から９割補助が出たから、福貴浦のみんなで総額2700万円出し合った計算になります。お金が足りない人も組合から借りたり、なんとかやりくりしてね。

震災後初めての県内産の養殖カキの出荷は2012年10月15日に解禁されましたが、処理場の完成が間に合わず、６日までは殻付きのままで出荷していたのが、11月７日、震災から１年８か月めにして、ようやく本来の福貴裏の生業である、むき牡蠣での出荷が始まりました。

> 2012.11.7 石巻市の福貴浦漁港でむきカキの出荷開始：震災前はカキ処理場は港ごとにあり、共同での利用は初めてだが、漁師たちは互いの苦労を知っているからこそ、支え合って歩み出している。「震災前と違い、なんでも共同でやってきた。困っていることあれば手伝う、そういう気持ちになった」
>
> 日テレNEWS24

震災前後で売上はどうですか？

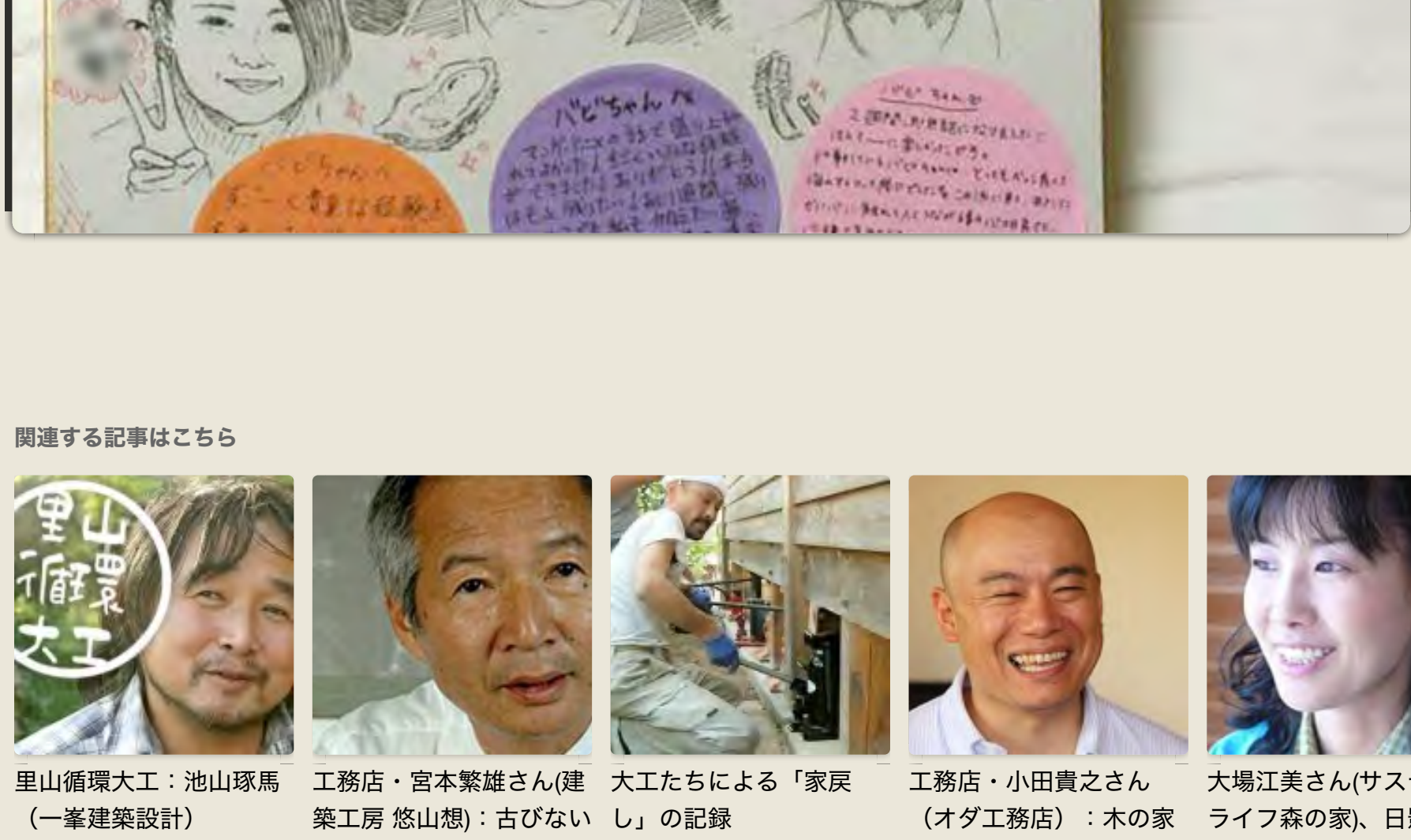
震災前と比べると、売上はまだまだ半分くらいかな。けれど、復興住宅も建てることだし、牡蠣でがんばるぞ！もっと稼ぐぞ！という想いでがんばります。

震災以前は、むきみにして漁業協同組合に出してさえしまえば、宮城漁連に買ってもらえるのがあたりまえ、その後、どこに売られていくのか、あんまり考えてもいなかったですね。宮城の牡蠣は放射能不検出だけれど、震災後、韓国は日本の被災地八県の海産物は買わなくなってる。これは結構、痛手ですけれど、今後は出荷してしまえばいいというだけでなく、全国の人たちに浜方面に来てもらって、カラ付きのまんま出して、楽しんで食べてもらうとか、そんなこともしていけたらいいなと思っています。

Like 0 ポスト

1 2 3

ボランティアさんから贈られた色紙



ありがとう
バビちゃん
YAMAHA
キミヨさん
バビちゃんへ

木の家イベントカレンダー

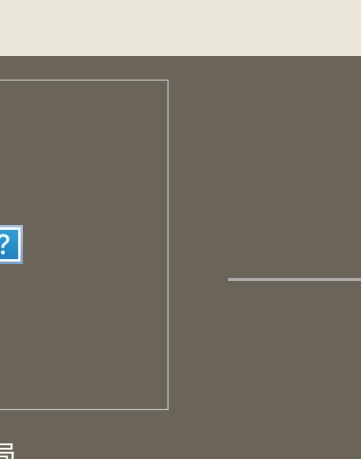
最近の特集記事
2018年3月27日 伝統建築に携わるすべての職人に光を
2018年2月7日 「伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」ユネスコ無形文化遺産候補選定のおしらせ
2018年1月2日 新春特別企画 2017年のベストショット
2017年12月14日 第17期木の家ネット総会：倉敷大会 - 民家改修と曳家-
2017年10月14日 気候風土適応住宅のチラシができました！
2017年9月4日 家のお風呂　こうやって作る、こうやって保つ
2017年8月8日 家にお風呂が入るまで
2017年6月30日 気候風土適応住宅のススメ
2017年6月3日 掛川総会３
2017年5月31日 掛川総会２

人気のある記事
伊勢神宮遷宮・御杣始祭り：300年の大木を伐る！ 18件のビュー
家のお風呂　こうやって作る、こうやって保つ 17件のビュー
冬の温熱調査合宿報告 15件のビュー
込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記 14件のビュー
古川 保の熊本市川尻町 震災日誌 11件のビュー
設計士・丹羽明人さん(丹羽明人アトリエ)：納得できる答を探して 11件のビュー
大工たちによる「家戻し」の記録 11件のビュー
工務店・西條正幸さん(ビオプラス西條デザイン)：北海道で無垢の木の家づくり 10件のビュー
設計士・川端眞さん（川端建築計画）：小さな石場建ての家 10件のビュー
設計士・古川保さん(古川設計室)：木の家づくりは仕組みづくり 9件のビュー

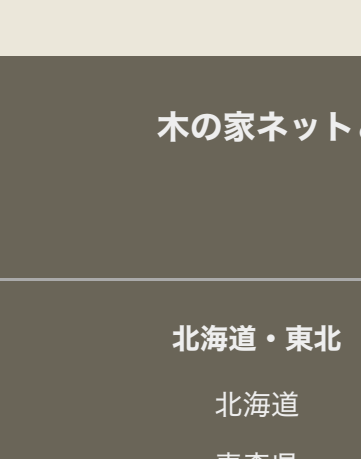
この記事のタグ
災害と木の家
現場レポート
環境と共生する家づくり
顔の見える関係

同じタグがついた別の記事
2014年6月5日 大場江美さん(サスティナライフ森の家)、日影良孝さん(日影良孝建築アトリエ)：手のひらに太陽の家
2015年7月27日 独立電源＝オフグリッドの家
2016年5月21日 熊本震災調査レポート
2012年6月15日 原発に頼らない家づくり＆暮らし方
2012年1月4日 第11期木の家ネット総会 宮城大会

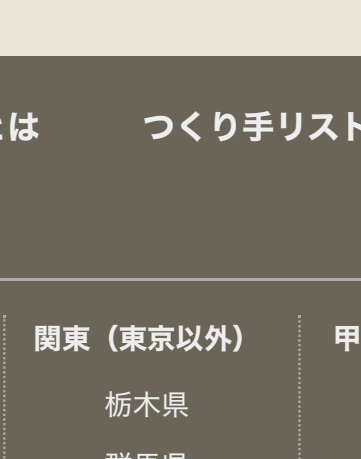
関連する記事はこちら



里山循環大工：池山琢馬（一峯建築設計）



工務店・宮本繁雄さん(建築工房 悠山想)：古びない家

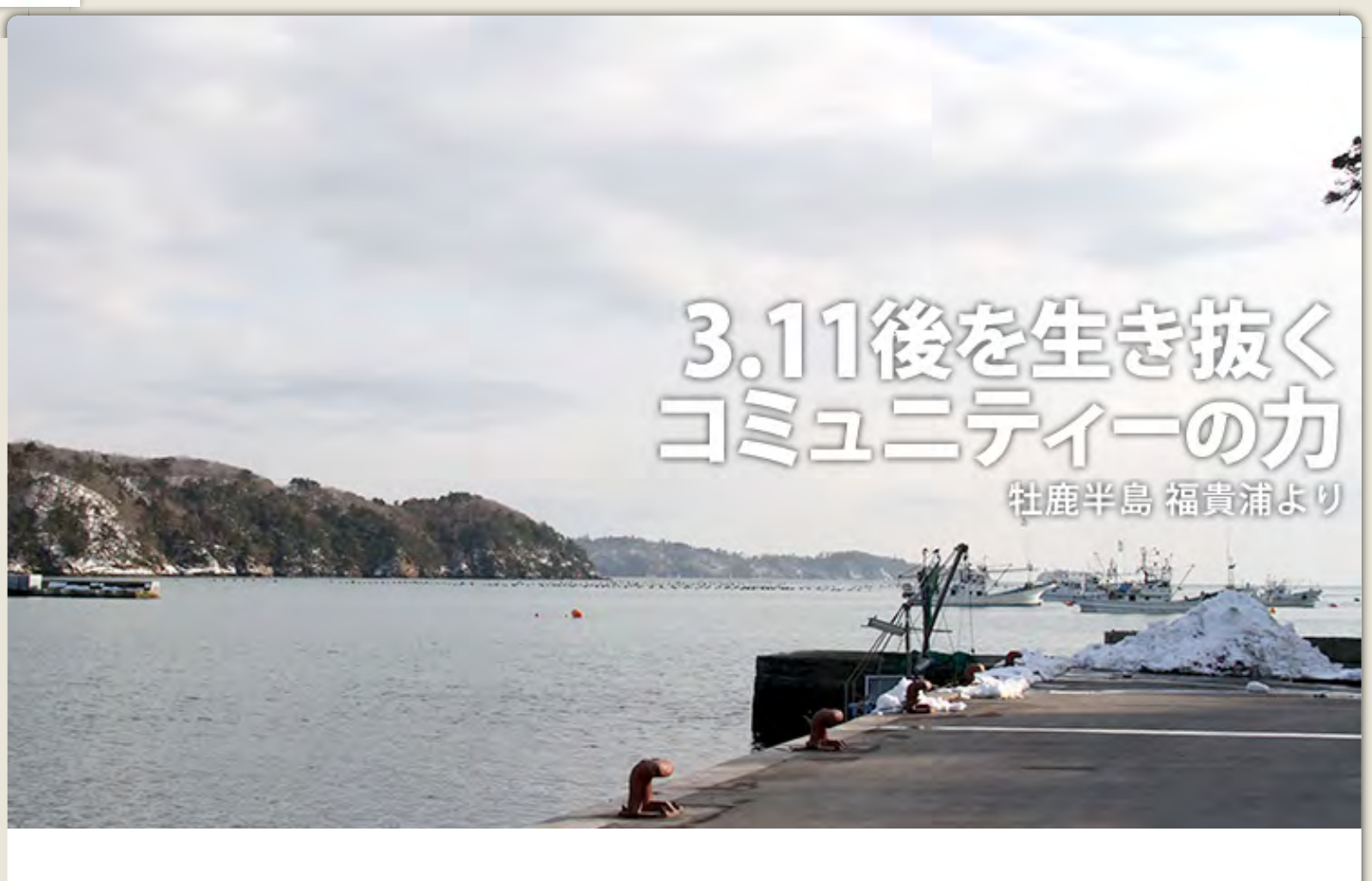


大工たちによる「家戻し」の記録

工務店・小田貴之さん（オダ工務店）：木の家づくりのプロデューサー

大場江美さん(サスティナライフ森の家)、日影良孝さん(日影良孝建築アトリエ)：手のひらに太陽の家

事務局
〒711-0906
岡山県倉敷市児島下の町5丁目7-3
児島舎内
mail： jimukyoku@kino-ie.net
tel： 086-486-5464



1 2 3

生業の牡蠣の養殖のメドがついてきて、次は、流された集落の高台移転事業が始まります。といっても、ようやく移転先となる３カ所の高台の場所が決まって来たところということです。「遅いといえば遅いけれど、家より何より、牡蠣の養殖ができることで必死で、ここまで来るのも、長いようであっという間だった」と阿部さんは言います。そして、高台移転先の福貴浦の集落再建は、マイケルと仲間達に依頼しようという流れになってきています。今後の展望について、訊いてみました。

生業の見通しも立ち ようやく高台集団移転に向けての造成へ

流された住まいの再建は？

家よりまず生業の復活が先！という感じが浜全体にあって、自分たちの住むところを考えるのは二の次だったな。

場所がなくて仮設住宅建設もなかなか進まず、みんなだんだんに避難所から親戚の家や倉庫などに移りながらしのいでいました。けれど、身を寄せるといっても、大所帯だとこれがなかなか大変で、若い世代は離れたところの借り上げや仮設に早くから移って、年寄りが一人、二人、親戚に身を寄せながら仮設住宅の完成を待つという感じでした。

かつて家があった浜は、津波のおそれということで居住が制限されていて、漁業施設しか建てられません。住宅は高台に集団移転することになるわけだけれど、高台の造成も始まっていない状況です。始まるっていう予告は何回かあったんですけどねー

浜のすぐ裏は、切り立った山。山の上の宅地造成予定地をながめるパピちゃんとマイケル

これから、どのように進んで行くのでしょうか？

高台移転にむけて、福貴浦の中での合意形成はできていて、もともと納税の関係で３つに分かれていた地区ごとにまとまって、３カ所で造成することが決まっています。家のことまでまだ考えられていないけれど、一軒一軒バラバラにでなく、福貴浦全体の再建を、マイケルさんたちにお願いしたいと思ってます。コミュニティーはしっかりあるので、調和のとれた感じにしたいしね。

地元での生業を大事に、みんなで生きて行く その「あたりまえ」に希望がある

震災前後で気持ちの変化はありますか？

震災前は、遊びに行くっていえば、石巻の町に飲みに行ってましたが、震災後は家に居る時間がうんと増えましたね。震災直後は、道も悪いし、ガソリンもないし、しかたなく家に居るという感じだったけれど、だんだん、なにも町に行かなくても、地元に居ても楽しいじゃないか！と思えるように変化してきたかな。

ここには、自分たちの生業がある、いっしょにやっていく仲間がいる。これまでやってきたことを大切にしながらみんなで生きていく、これまであたりまえだったことを、これからはあえて、そうやって生きてくことを自分たちで選んでるんだなって、思いますよ。

震災を経て新たに得たものも？

地元には若い世代もいるし、ボランティアさんたちだって来てくれる。いろいろな経験を積んで来た全国の人たちともたくさん知り合えて、そんな交流の中で、ますます、この地元で生業を大事にして生きてくんでいいんだな、と思えています。

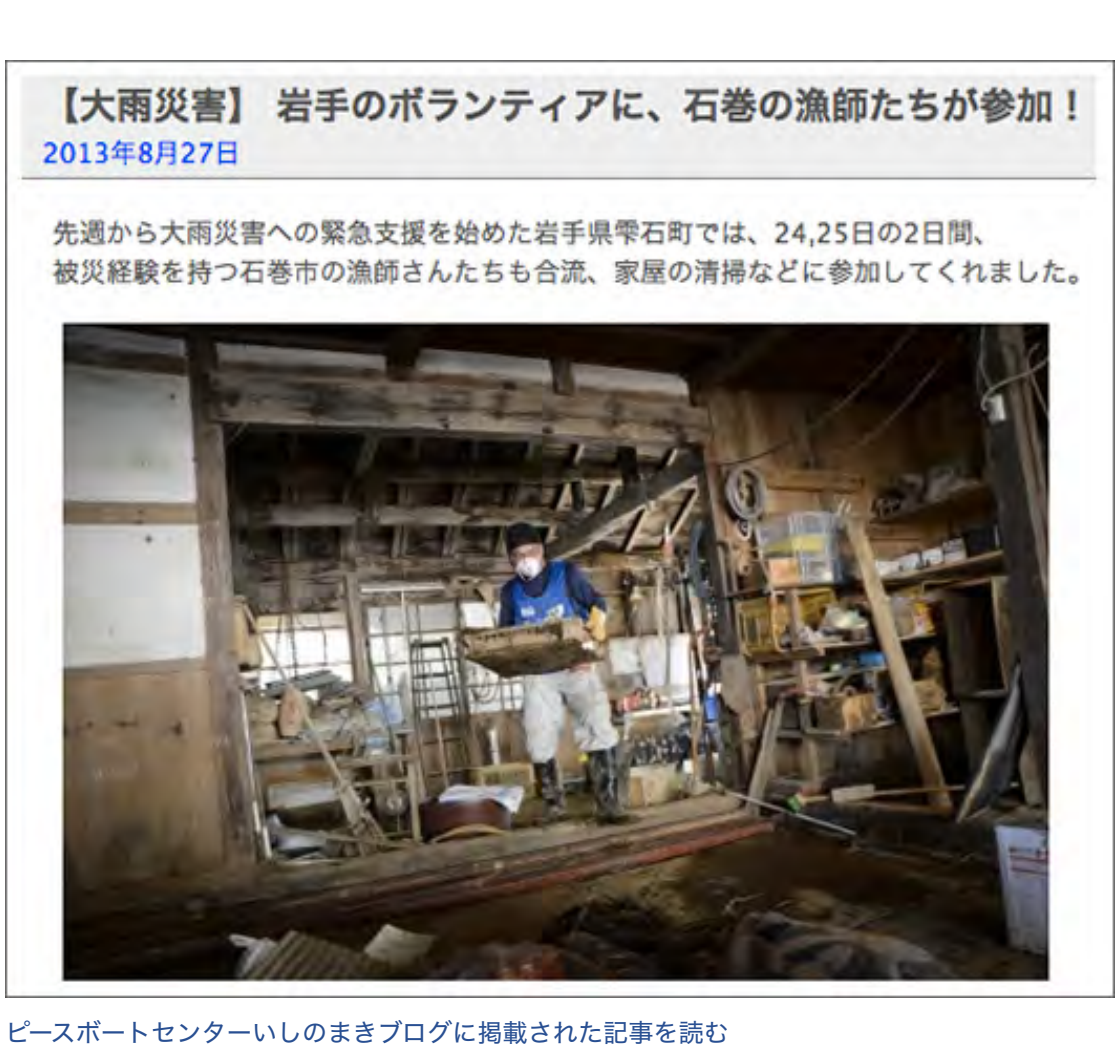
震災後におぼえた、家にいるもうひとつの楽しみが「初音ミク」。震災後、５月中旬まで停電してたので、テレビも見れない。クルマから電源をとって、ケータイ見るのが唯一の情報源だったんだけれど、そんな中で、ミクにも出会いました。地元愛とインターネットって、逆のベクトルのようだけれど、両立するんですよね！

ボーカル音源ソフトによって生み出されたヴァーチャルシンガー「初音ミク」。大のミクファンであるパピちゃん愛用のスマホは、39,000台限定発売の「XperiaTM feat. HATSUNE MIKU」でした。

暮らしに合ったコミュニティーとして 移転先集落を再生したい

マイケルとの出会いは？

造成の話が出始めてきた2013年の夏、いつも「イマ、ココ プロジェクト。」でお世話になってるピースボートさんが雫石に大雨災害のボランティアに派遣することになって、福貴浦やほかの浜からも、仲間達が参加したんです。そこで、人を介してマイケルさんっていう人がいる、っていうことを知ったんだよね。


【大雨災害】 岩手のボランティアに、石巻の漁師たちが参加！
2013年8月27日

先週から大雨災害への緊急支援を始めた岩手県雫石町では、24,25日の2日間、被災経験を持つ石巻市の漁師さんたちも合流、家屋の清掃などに参加してくれました。

ピースポートセンターいしのまきブログに掲載された記事を読む

ぼくは福貴浦チームとは入れ違いで雫石に行ったんだけど、ぼくが「復興応援大工」として活動していきたい、ということを知ってたピースボートの人が、ぼくの話をしてくれてたんだよね。「それは会ってみたいな」っていうことになって、雫石から帰ってから、ぼくが福貴浦を訪ねることになったんです。

福貴浦に来てもらった時に、地域材で、その地域の暮らしに合った木の家を、というマイケルさんの話を聞いて、震災以来自分が思って来たことと重なる部分が多く、共感しましたね。自分たちの生業に合った家を建てられそう、高台に新しくできる集落がいい感じのコミュニティーになるかも、という期待が持ててきました。

どのように集団移転先の集落を作って行く？

ぼくは地元ではないし、一人では集落ひとつまとめて作るということは、とてもできない。石巻市内で佐々木工務店を引っ張っているしげちゃん（佐々木茂樹さん）とチームでなら、やれると思ってる。

福貴浦のみんなは、牡蠣養殖をベースにまとまっていこうという集落の想いをもってるから、マイケルやしげちゃんのチームにまとまって建ててもらえるということはいい話としてとらえています。外観が整うというのもある。けれど、それ以上に、自分たちで計画して自分たちらしい家を作ろう、ということの方が大きいかな。

■左：石巻にある佐々木工務店の作業場　■右：ある浜で行われた上棟式。浜独特の縁起物

浜の生業に合った家に住みたい！

マイケルたちに頼もうと決めたのは何故？

マイケルさんと出会って地元で生きて行くという想いの部分で意気投合したのがスタートだったけれど、決め手はしげちゃんだったよね。

石巻市内で工務店を経営しているしげちゃんは、十三浜大室出身で、実家はわかめの養殖をしてる。ぼくと出会ってすぐ、ぼくの昔やったシゴトを見たいって、埼玉までクルマ飛ばして行って来たり、行動力があるんだよね。地域で木造をがんばってるだけでなく、震災後、地元の祭に「大室南部」神楽を復活する活動もしてきている。

小さい頃に地元で子ども神楽をやっていた若い衆が言い出したことがきっかけとなって、石巻市内、県外、借り上げ住宅、仮設と、バラバラになっていた浜の人が、集まって稽古をしたり、祭りに一時的にも帰って来たりするようになって。十三浜の復興支援をするPARCICの日方里砂さんが教育委員会に働きかけるなどのサポートもあり、神楽復活へのパワーが地域再生のためにすごくプラスになっている。

しげちゃんと初めて会った時「家に帰って来たら、まず、ウェットスーツのまんま、フロに直行したいですよね、だったら動線はこうで・・」なんて、話がツーカーで。「浜の生活を分かってる人だから、間違いない」って思いました。

■右：震災後にしげちゃんが仲間達と復活させた大室南部神楽。しげちゃんは左の弁慶の役を舞っている　■左上：仲間の被り物のひもを結んでいるしげちゃんこと佐々木茂樹さん　■左下：神楽は囃子方の先輩から学ぶ 「大室南部神楽保存会」のブログ

大室南部神楽保存会

心に空いた穴は、恐らく生涯埋まることはないかもしれない。ただ、この地に息づいていた全てをここで無に帰すことは絶対したくない。

こんな時だからこそ、娯楽を。地域に根付いた神楽を。この地で生きてきた人々が、自分たちの生きてきた人生が、次の世代に確かに芽吹いて息づいているのだと。今までしてきたことが決して無駄でなかったと証明してみせようじゃないか。

「おどげでもかだってねっけ、やってらいね」

こうなってしまったのはみんな一緒。仕方のないことだ。だから悲しむばかりでなく、ふざけたことでも言って、元気を出していかないとやってられないじゃないか

わたしたちは大真面目に「おどげだごど」をするつもりなのである。

参考リンク
■ 石巻市北上町十三浜「大室南部神楽保存会」
2012年4月28日「わげすだち（若い衆たち）」で神楽復活を話し合った夜の投稿「北園に集う」
■PARCIC 日方里砂さんによるレポート
「十三浜の伝統芸能『南部神楽』地元の力で復興へスタート」
■埼玉県入間市「神楽乃朋友会」 梅津史紀氏によるレポート
「震災以降、ついに復活！地域手作りの温もり伝わる大室南部神楽」

大きなものから自立して 地元の循環に寄与する集落づくりを

集落ごと再生を依頼するメリットは？

これまでずっと、自然の恵みと地域のコミュニティーで生かされてきた。だから家づくりも、その延長線で生きて行きたいと思ってます。

だとしたら、ハウスメーカーにもってかれて、お金は遠くに飛んで行くなんて、つまらないじゃない？ 一戸一戸てんでバラバラに住宅メーカーのカタログにあるような、この場所らしくないような家を作るなんて、もったいないよ。どうせなら、地元の木、地元の建設業にお金が循環するような家づくりがいい。

大きなものから、自立したい。マイケルさんと、そんな話で意気投合してます。家づくりだけでなく、エネルギーの面での自給も考えたいですね。震災後、ライフラインが途切れることのしんどさは、いやというほど体験してるからね。ソーラーで自家発電して、電気をシェアするなんていうエネルギー自給を考えるのもいいよね。きのうも停電したしな〜

ちょっと乱入されてただきます！申し遅れましたが、私、パピちゃんちのビジュアル系猫の「おごご」と申します。帰って行ったボランティアさんからファンレターやプレゼントが届く、福貴浦の実力派看板猫にゃんですよ。・・・ちょっとひと言、いいですか？

ドキッ

マイケルさんっ、責任重大ですね！

ボランティアさんに いつでも来てもらえるような家にしたい

阿部さんご自身の家について、夢がありますか？

ボランティアさんにいつでも気軽に泊まってもらえるような「ゲストルーム」が欲しいなあ。そのうち、リピーターでよく来てくれるボランティアさんが家族をもつようになったら「第二のふるさと」として子連れで遊びに来てもらって、うちの「仮孫」になってもらいたい！ばあさん、喜ぶだろうな〜

おごごからもリクエストにゃ！高台集落には出入り自由の猫ドアもつけてほしいにゃ〜・・・パピちゃんにもひと言、いい？

ドキッ

自分で結婚して子どもつくる気はないの！？

いいの、いいの、おごごが居るからさ〜　あとは自分用に、ミク三昧できる「オタクルーム」さえあれば（笑）

最後にこれからに向けてひとことずつ、お願いします！

集落内でのお金と時間の工面を！

漁師って気が荒いように世間では思われてるのかな。けど、福貴浦の人って、割とのんびりしてでね。牡蠣の養殖が再開できて、ほっとしてて、家のことはようやくこれから、という感じです。高台の造成が始まらないことには実感ないのかもしれないけれど、それももう真近。といっても、いつからっていう予告が何回も延期になっていて、ほんとにいつからなのかはまだ未定です。まあ、だから今のうちに、集落内の話し合い、お金の工面など、着々とするべき準備をしていきたいと思います。

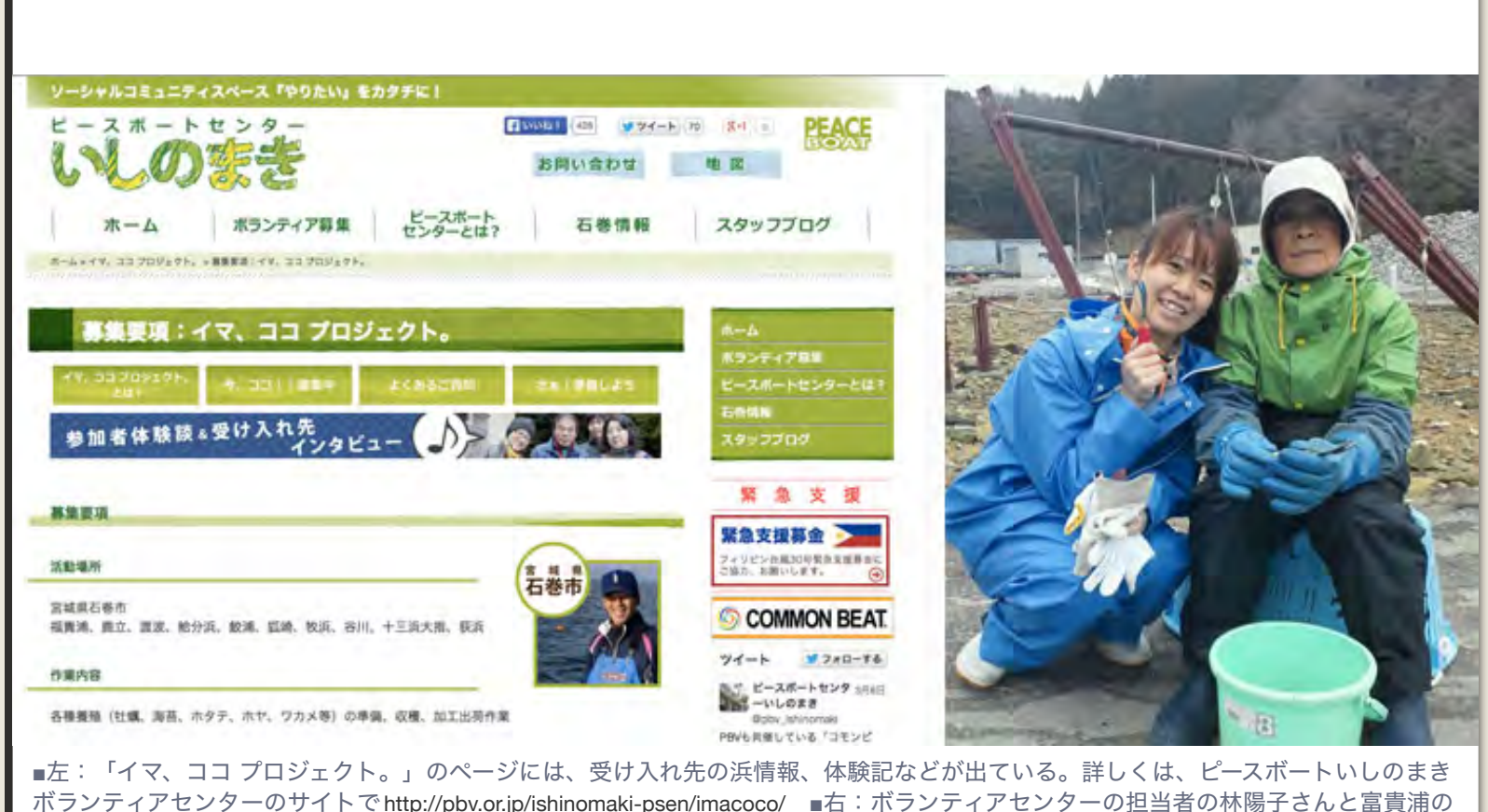
木の家ネットの仲間の応援にも期待！

集落まるごとの再生となると、一棟一棟いいものを作るっていうだけでなく、全体のプランニング、コストやスケジュールの管理をしっかりやっていくことが必要。ぼくだけではやりきれないけれど、しげちゃんの佐々木工務店で元請けになってくれるなら、やれる。ぼくは、木組みや地元材料でそれをどう実現するか、という技術でのサポートや、上棟で木の家ネットはじめ仲間たちの応援を頼んだり、というところでがんばりたい。

ぜひ私にも会いにきてにゃ〜

一週間以上からの漁村滞在型プログラム 「イマ、ココ プロジェクト。」

ピースボートいしのまきボランティアセンターでは、福貴浦はじめ、まだまだ人手が必要な浜エリアでの漁村滞在型プログラムを行っており、一週間以上からの滞在で、受け入れを仲介しています。牡蠣の収穫シーズンは4月いっぱいですが、種牡蠣のしこみ、わかめやほやの収穫など、浜エリアにはいつでも作業はたくさんあるそうです。「漁業の作業のお手伝いだけでなく、個人と個人とのつながりができることを大切にしています」とのことでした。思い切って、行ってみては？！


ソーシャルコミュニティスペース "やりたい" をカタチに！
ピースボートセンター
いしのまき
ホーム
ボランティア募集
ピースボートセンターとは？
石巻情報
スタッフブログ
募集要項：イマ、ココ プロジェクト。
参加者体験談＆受け入れ先インタビュー
募集要項
活動場所
作業内容
緊急支援
緊急支援募金
COMMON BEAT
■左：「イマ、ココ プロジェクト。」のページには、受け入れ先の浜情報、体験記などが出ている。詳しくは、ピースボートいしのまきボランティアセンターのサイトで http://pbv.or.jp/ishinomaki-psen/imacoco/　■右：ボランティアセンターの担当者の林陽子さんと富貴浦のおばば

「イマ、ココ プロジェクト。」の紹介文より

浜の人はよく、「ここには、海しかない」と言います。 あの日、海は多くのものを奪っていきました。大切な物も愛する人も。 それでも、海を離れずそこに生きる漁師の背中には、「ココ」で生きる覚悟があります。 だからこそ、彼らは陽気で強くてしなやかなのだと思います。 そして、何よりもそれでも「海」を愛しているのだと思います。 そんな彼らの生き様に出会える機会となってくれたら…

「今、共に」

1 2 3

最後に、牡蠣を手にしたマイケルとパピちゃんのツーショット。地域の新しい風景をつくることを夢見る二人。

関連する記事はこちら

里山循環大工：池山琢馬（一峯建築設計）

工務店・宮本繁雄さん(建築工房 悠山想)：古びない家

大工たちによる「家戻し」の記録

工務店・小田貴之さん（オダ工務店）：木の家づくりのプロデューサー

大場江美さん(サスティナライフ森の家)、日影良孝さん(日影良孝建築アトリエ)：手のひらに太陽の家

木の家イベントカレンダー

最近の特集記事
- 2016年12月23日 掛川総会
- 2016年8月2日 込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記
- 2016年6月21日 熊本震災レポート 2
- 2016年6月9日 大工たちによる「家戻し」の記録
- 2016年5月21日 熊本震災調査レポート
- 2016年4月28日 古川 保の熊本市川尻町 震災日誌
- 2016年3月31日 2/16 衆議院第二議員会館 調査報告会レポート
- 2016年1月27日 地域型住宅の省エネルギーを探る 〜 2016.1.17 京都フォラム報告
- 2016年1月14日 第15期 木の家ネット総会 高知大会 〜会員発表篇〜
- 2015年11月13日 工務店・小田貴之さん（オダ工務店）：木の家づくりのプロデューサー

人気のある記事
- 伊勢神宮遷宮・御杣始祭り：300年の大木を伐る！ 18件のビュー
- 家のお風呂　こうやって作る、こうやって保つ 17件のビュー
- 冬の温熱調査合宿報告 15件のビュー
- 込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記 14件のビュー
- 設計士・丹羽明人さん(丹羽明人アトリエ)：納得できる答を探して 11件のビュー
- 大工たちによる「家戻し」の記録 11件のビュー
- 古川 保の熊本市川尻町 震災日誌 11件のビュー
- 工務店・西條正幸さん(ビオプラス西條デザイン)：北海道で無垢の木の家づくり 10件のビュー
- 設計士・川端眞さん（川端建築計画）：小さな石場建ての家 10件のビュー
- 設計士・古川保さん(古川設計室)：木の家づくりは仕組みづくり 9件のビュー

この記事のタグ
- 災害と木の家
- 現場レポート
- 環境と共生する家づくり
- 顔の見える関係

同じタグがついた別の記事
- 2015年7月27日 独立電源＝オフグリッドの家
- 2010年1月16日 新潟県中越地震被災地訪問レポート
- 2016年4月28日 古川 保の熊本市川尻町 震災日誌
- 2012年6月15日 原発に頼らない家づくり＆暮らし方
- 2016年6月9日 大工たちによる「家戻し」の記録

事務局
〒711-0906
岡山県倉敷市児島下の町5丁目7-3
児島舎内
mail： jimukyoku@kino-ie.net
tel： 086-486-5464